第三分科会

『地域防災はおやじがけん引する』を振り返って

坂口　清敏

はじめに

本分科会には，おやじ 2 名（著者含），家庭教育支援チームから 6 名の女性，大学生の男女各 1 名の計 10 名の参加がありました。テーマに「おやじ」の文言があるにもかかわらず，いわゆる「おやじ」は 1/5 でしたので，「おやじ」を「おとな」に読み替えて議論を進めることにしました。

本分科会で目指していたのは，「真の地域防災とは何か？」，「真の地域防災を実現するためには何をすれば良いのか？おやじ（大人）は何ができるのか？」を参加者全員で確認し，共有することでした。そこでまず，「そもそも災害とは？」について考え，「防災」を展望してみることにしました。

災害とは？

「災害」とは何でしょうか。地震，津波，台風，大雨，火事などがイメージされるかと思います。ここに挙げた 5 つの事象は，大きく 2 つのグループに分けることができます。すなわち「地震，津波，台風，大雨」と「火事」の 2 つです。前者は自然現象であり，後者は人為的事象です（自然山火事などもありますが，温暖化が原因と考えられるなど，少なからず人為的要因を想像させます）。これらの中で，人の力で防ぐ（止める）ことのできるものは後者の「火事」だけです。人為的事象なのですから当然です。したがって「火事防災」に関しては，多くの人で共通の理解が得られそうです。では，前者のグループはどうでしょうか。前者は自然現象なので人の力ではどうすることもできませんし，そもそも，それ自体は災害ではありません。これらの自然現象は地球が生きている証拠で，もし仮に，これらの無い世界が実現できた時，地球は滅びていることになります。しかし，我々は，往々にしてこれら自然現象を「災害」と決めつけているようです。なぜ，災害としてしまうのでしょうか。それは，これらの自然現象で人（人の営み）が被害を受けるからにほかなりません。したがって，これら自然現象に起因する「人（の営み）への災害」を防ぐことが「防災」ということになりそうです。津波を例に考えてみましょう。津波に起因する災害を防ぐために防潮堤が作られています。ではこの防潮堤は津波に起因する災害を防いでくれるのでしょうか？もちろん，防いでくれるとは思いますが，“そうでない場合もあるのでは”とも十分に想像できます。そもそも防潮堤は，津波に起因する災害から人（の営み）を守るための「時間稼ぎ」をしてくれるだけに過ぎません。だからと言って役立たずでもありません。防潮堤が稼いでくれる「時間」がとても大切で，この時間を有効に使うことが自然現象発生後の「防災」につながるのではないでしょうか。他の自然現象に関しても，限られた「時間」を有効に使うということが，自然現象発生後の「防災」にとって重要な意味を持ちそうです。

防災とは？

「防災」とは何だと思うか，率直に意見を聞いてみました。いろいろなご意見は出ましたが，要約すれば「災害の発生する前に何かを（物，心構え）備えること」と集約できました。では，「防災訓練」とは？という問に変えると，参加者の実体験から「災害が発生した後のために何かを（物，心構え）備えること」という事になりました。「訓練」という文字が付くだけで，災害の前と後という時系列ができてしまいます。「物」の備えであれば，災害の前後であっても同じ意味を持ちそうですが，「心構え」の備えということになると，災害の前後でその意味が異なってきます。「防災」は災害を防ぐことですから，時系列では「災害の前」での何かを指すことになるかと思います。では，地域で行なわれている「防災訓練」は本当に「防災」のための訓練になっているのでしょうか？この問に関して，参加者から実体験に基づいたお話を聴くことができました。皆さんのお話からは，①防災訓練はやった方が良い。②防災訓練は画一的な訓練ではなく，地域の特徴に即した訓練でなければならない。③発災時の行動訓練が，机上の空論のようで実感の伴わないものになっている。など，具体的なお話を聴くことができました。また，そもそも，④地域防災訓練自体が無いので不安に感じることもある。との意見もありました。どうやら，「防災訓練」はその意味よりも“やる”，“やった”という方向で自己完結していくようで，場合によっては形骸化している印象です。しかも，災害の後をターゲットにしたものが殆どのようでした（もちろん，災害後を想定した訓練は重要で，否定するものではありません）。では，真の地域防災を実現するためには何が必要なのでしょうか？何をすれば良いのでしょうか？訓練は当然必要です。でも，形骸化した実感の伴わない防災訓練は意味を成しません。

時間を活かす

「時間」が重要な意味を持つと述べましたが，この「時間」をどう活かせば良いのでしょうか。ここでは，この「時間」を２つに分類します。一つは自然現象が既に発生していて災害に繋がりそうな非常時にあたる時間，もう一つは，自然現象の発生していない日常時にあたる時間です。前者の時間は限られています。防潮堤が時間稼ぎしたとしてもそんなに長い時間が確保されるわけでもありません。この限られた短い時間で成すべき「防災」は「しなやかにかわす」ということではないでしょうか。牙をむく自然現象に対して抗うのではなく「かわす」のです。しかも「しなやかに」。すなわち，安全な場所に安全な方法で迅速に逃げることだと思います。この行動を実践できるかできないかは，所謂「防災訓練」の成果に直結するのではないでしょうか。これを目的とした防災訓練は既に実施されているかと思いますし，地域性（海，川，山，崖，住宅密集地）に特化した「防災」に寄与する訓練も実施可能です。

では，後者の「時間」はどうでしょう。後者の時間はたっぷりあります。このたっぷりの時間で行なう「防災」とは何でしょうか。それは，「地域コミュニティーの醸成」だと思います。「防災」は一人一人の心構えではありますが，意識を同じくする人が協力し合ってこそ実現できるものだと思います。そのためには，日頃から，顔の見えるお付き合いの輪を広げておくことが重要だと思います。先の震災の時も，しっかりした地域コミュニティ

ーが形成されていた被災地の方が，発災前の「しなやかにかわす行動」も，発災後の避難所運営などもスムーズに出来ていたようです。では，「地域コミュニティーの醸成」のためにおやじ（おとな）は何をすれば良いのでしょうか。何か特別なことをしなければならないのでしょうか？そうではないと思います。例えば，既におやじの会に入って色々な行事等に協力しているのであれば，それを続けることです。そして，できるだけ多くの人と顔を合わせることです。お話のできる関係になれれば，なお素晴らしいことだと思います。何かの団体に属していなくても大丈夫です。近所の人とコミュニケーションをとること，そしてこれを続けることです。いわゆる“他人”と接する機会を大切にする日常生活を１０年，２０年，３０年と続けていくことだと思います。真の地域コミュニティーは意識して「作る」ものでは無くて，いつの間にかそこに「ある」ものでなければならないと思います。そのためには，このたっぷりの時間が重要な意味を持ち，たっぷりの時間が必要なのだと思います。

おわりに

第三分科会では，異なる地域性を持った処にお住いの方々が集まって，「防災」をキーワードにその地域ならではの取り組みや課題を聴くことができました。事例紹介もあって，お互いに参考になるお話も聴くことができました。いろんなお考えを聴くことができましたが，皆さんに共通する思いは“人の輪って大切だよね。”だったと思います。「防災」は人の為にあるものです。人の為にするものです。であれば，そこに人々の日常が垣間見えるものでなければならないはず。地域の中で，元気に，楽しく，はつらつとした生活を続けることが真の地域防災に繋がるのではないでしょうか。